

保育学生の体育授業を考える

——縄跳びの歴史と授業実践から——

高橋 裕勝・永井 理恵子

帝京短期大学 こども教育学科

【抄録】

【問題・目的】 現代の保育学生は、幼少期に運動能力が懸念された世代であるとともに、幼少期からの運動経験の不足も推測される。このような学生が、将来、幼児の運動能力の問題に向き合うためには、保育者養成校における体育関連授業のなかで、何をどのように学習するのかについて、十分な検討が必要である。筆者は、保育者養成校において「体育実技」を担当し、学生の振り返り学習として、毎回の授業後に「授業内容」と「気づいたことや感じたこと」を授業ノートへ記述することを課題としている。そこで、本研究では、授業ノートの記述をテキストマイニングの手法を用いて分析し、受講学生全体の特徴や課題を見出すことを目的とする。なお、今回は、縄跳びの授業実践を研究対象とし、巨視的な観点から、縄跳びの起源とその変遷についての整理もおこなう。

【方法】 縄跳びの歴史は、文献や論文を基に、民俗学と運動学の二派における成果を合わせて整理した。縄跳びの授業実践は、学生の授業ノートの記述を KH Coder 3 を用いて分析し、質的な解釈を行った。

【結果】 縄跳びの歴史は、縄跳びのルーツ及び学校体育導入に至る経緯が整理された。学生の授業ノートの記述は、1) 幼児の跳び方、2) 大縄の楽しさ、3) 大縄の難しさ、4) 大縄の回し方の四つに大別することができた。

【考察】 縄跳びの歴史は、1) 遊びとしての縄跳び、2) 運動としての縄跳びの二つの側面が見出され、前者の重要性と意義を改めて確認した。学生の授業ノートの記述は、授業者が授業中に直接観察できなかった学生の気づいたことや感じたことについて、受講学生全体の特徴や課題を見出すことができた。また、運動学習全般においても応用できる記述もあり、縄跳びの運動学習教材としての価値も確認できた。今後の課題として三つあげることができる。一つ目は、これまでの授業実践を、遊びとしての縄跳び、運動としての縄跳びの両面から捉え直すこと。二つ目は、個人の授業ノートを、学生がお互いに学び合う教材として利用できるようにすること。三つ目は、学生が授業のなかで、わかりかけたり、つかみかけたりした知識や技能をどのようにして高めていくかである。

【キーワード】 保育学生、体育、授業ノート、遊びとしての縄跳び、運動としての縄跳び

I. 問題の所在と目的

1. はじめに

幼児の運動能力に関する全国規模の調査は、森らが1966年以降2016年までの間に7回実施したものが唯一である¹⁾。2016年の調査報告によると、「時代推移全体としては、(中略)徐々に増加傾向を示しているが、幼児の運動能力そのものは1986年の結果からするとまだ低い位置にあり、今後の更なる取り組みの必要性が示唆され²⁾」ている。

一方、保育学生の体力・運動能力については、

川上・増田・竹内(2017)が、1981年から2016年の間に発表された複数の先行研究をもとに、同世代の全国平均よりも低い傾向にあることを確認し、保育学生の運動経験は、少ないと推測できると述べている³⁾。

現代の保育学生は、幼少期に運動能力が懸念された世代であるとともに、幼少期からの運動経験の不足も推測される。このような学生が、将来、幼児の運動能力の問題に向き合うためには、保育者養成校における体育関連授業のなかで、何をどのように学習するのかについて、十分な検討が必要である。

筆者は、保育者養成校において「体育実技」を担当し、学生の振り返り学習として、毎回の授業後に「授業内容」と「気づいたことや感じたこと」を授業ノートへ記述することを課題としている。これまで、授業ノートを通して、学生一人ひとりの課題を捉え、個別にフィードバックしてきたが、受講学生全体の特徴や課題の整理とそのフィードバックは、不十分である。

そこで、本研究では、授業ノートの記述をテキストマイニングの手法を用いて分析し、受講学生全体の特徴や課題を見出すことを目的とする。なお、今回は、縄跳びの授業実践を研究対象とする。縄跳びは、子どもたちに人気があり^{4,5)}、幼稚園や保育所でも広く認められた活動であるが、その歴史的な背景についての論考は少ない。巨視的な観点から、まずは、縄跳びの起源とその変遷について整理したい。

2. 「縄跳び」の起源とその変遷

「縄跳び」の歴史に関する研究は主として、民俗学と運動学の二派においておこなわれているが、さほど多くは産出されていないようである。ここではその限られた先行研究から、上記二派における成果を合わせて整理してみたい。今回の論考では、榎木繁男他著『誰でもできる楽しいなわとび』（大修館書店、2005 以下文献1とする）第3章「なわとびの運動特性と魅力」1. なわとびの起源と歴史、稲葉茂勝著『縄文人から「新縄人」・ロープスキッパーへのなわとび学』（今人舎、2016 以下文献2とする）パート1：「なわとびの歴史」を主軸として、幾つかの文献や論文などを併せ用いて整理する。上記の文献1および2は高度な専門書ではなく児童・生徒が十分に読解できるものでありながら、縄跳びの歴史について多くの資料を掲載しながら詳細に紹介している有益な文献である。

(1) 「縄跳び」の起源

上記文献2は、縄跳びに用いられる縄は古代より世界的に存在していたのではないかと述べているが⁶⁾、とりわけ日本では「縄文時代」と呼ばれる時代があるように、古代から縄が作られ、生活に用いられていたことを確認している。インカ帝国においても「キープ」という計算方法で縄を用いて結び目によって計数していたという。縄は、このような生活の道具として活用

された他、特に太く作られた縄は「綱」と呼ばれ、世界的に神事や祭、綱引きに使用されてきたと文献2は述べている⁷⁾。縄跳びに関する歴史研究が進んでいない理由として文献2は、綱や紐を用いた遊びに関する記録は見られるものの、縄跳びに関する記録は見つかっていないことを挙げているが⁸⁾、併せて同書は、小学校教諭で体育学研究者である古屋三郎による著書『なわとび』（不昧堂出版、1968）の記述を紹介し、縄ではなく棒や蔓など跳ぶ行為は原始時代からおこなわれていたのではないかと述べている⁹⁾。

(2) 中世における「縄跳び」らしきもの

上記文献2では、実際の絵図を掲載しつつ、我が国の平安時代の『年中行事絵巻』において「なわの両端に棒をつけたものであそぶ人や、なわの先にわらやぞうりを結びつけて、犬とじゃれあう子どもがえがかれているのを見てとれ」¹⁰⁾ることや、平安時代から鎌倉時代に描かれた『鳥獣戯画』においても「なわを持ったウサギや、なわのようなものを持っておどるカエルがえがかれてい」¹¹⁾ることを確認し、縄を用いた遊びが既に中世日本においておこなわれていたことを推測している一方で、縄跳びがおこなわれていた事実は確認できないと述べている。

(3) 近世における縄跳びの出現～遊びとしての縄跳び～

近世になると西洋、日本ともに、明らかに縄跳びがおこなわれていたことが確認できる。

文献2は、西洋美術史研究者である森洋子（1959 - ）の著書『ブリューゲルの「子供の遊戯」遊びの図像学』（未来社、1989）からの転載により、オランダの詩人であるルーメル・フィッセル（Roemer Visscher、生没年確認不可能）著『寓意人形』（原書名確認不能、1614）掲載の「愚かな労苦」という絵と注釈を紹介している¹²⁾。この絵画では子どもが縄ではなく紐と思しき細いものを両手に持ち、前進する駆けあし跳びをしている様子が描かれており、以下のような注釈がついているという¹³⁾。「男の子たちはこんなふうにして、自分の手にもっている紐の上を跳び、紐をどうにか足の下にくぐらせる。そのため彼らは非常に疲れ、一呼吸ごとに息を切らせ、顔から汗を流す」というものである。このこと

から文献2は、「ヨーロッパではおそくとも17世紀には、なわとびが子どもたちのあそびとして広まっていたことがわかります」¹⁴⁾と述べている。ちなみに、『寓意人形』が書かれた17世紀半ばのオランダにおいては、縄跳びを含む子どもの遊びは一般に批判的であったと、十七世紀オランダ美術史研究を専門とする小林頼子は雑誌寄稿文中で述べている¹⁵⁾。同時に文献2は『英語のあそびうた 生きているマザーグース』（評論社、1976）も紹介し、このなかに「なわとび歌」が掲載されていることを述べてもおり¹⁶⁾、英米においても20世紀前半には既に「縄跳び」が存在していたことを紹介している。

一方、上記文献1は、西洋における縄跳びの起源はイギリスにおいてホップの蔓を用いておこなっていたと記録があると述べているが、それを明らかに確認できる文献および年代は認められないとしている¹⁷⁾。同書は、17世紀中ごろに彫られた銅画に子どもが短縄跳びをおこなっている様子を彫ったものがあるとも述べているものの、西洋における縄跳びの発祥時期を「はっきりとは断定できず、中世であったかもしれないし、近代になってからであったかも知れないと言わざるを得ない」¹⁸⁾と整理している。

こうした西洋の状況に対して、近世日本における縄跳びの様子はどのようなものだったのだろうか。上記文献2は、歌川芳虎（うたがわ・よしとら、1836 - 1880）が制作した『子供遊び尽くし』（1848 - 1854頃？）を絵図とともに紹介し、そこに子どもが縄跳びをしている画を確認したうえで、江戸期において「縄跳び」が子どもの遊びとして既におこなわれていたことを示している¹⁹⁾。そこには確かに、足袋と草履を履いた女兒が縄跳びの構えをしている様子が描かれている²⁰⁾。前掲『寓意人形』（1614）より200年余も後世ではあるものの、近代に至る以前に日本でも縄跳びが遊びとして行われていたことが確認できる。

一方、上記文献1は、やや異なった見解を示している。同書は、日本における縄は『古事記』や『日本書紀』などに数々の種類の縄の記述が確認できるので、それを使用した遊びの一つとして縄跳びもおこなわれていたのではないかと推測している²¹⁾。しかしその一方で同書は、国文学者の相馬大（そうま・だい、1926 - 2011）の論を引き合いに出し、江戸期までの日本にお

ける縄は神聖なものとして認識されていたため、それを踏んだり超えたりする遊びがおこなわれていたとは考えにくいのではないかと述べているのである²²⁾。筆者には、この論にも一理あるように思われる。日本民俗学者で民間信仰を研究する黒田一充による論文「海浜の聖地における祭祀：国東半島・武多都神社を中心にして」（関西大学博物館紀要11巻、2005年3月）を見ると、大分県国東半島にある武多都（たけたづ）神社に長く伝わる御祓（オンバレ）祭では今日でも、「茅の輪神事」において茅の輪を潜るのではなく、「茅の縄を両手でつかんでひとりずつ縄跳びをする。最初に宮司が跳んだ後、順番に縄を回して三回ずつ跳ぶ」²³⁾と書いてある。ここに確認できるように、日本における縄は確かに生活の道具である一方、神事において重要な役割を占めるものでもあり、これを「跳ぶ」という行為である縄跳びが、民意において如何に捉えられていたのかという視点から縄跳びを分析することについて一考の余地があろう。

ところで、先の文献2は、洋の東西における近世の縄跳びを紹介した後、最後を以下の文で締めくくっている。「日本で現在のようになわとびがおこなわれるようになったのは、明治時代で、そのなわとびは、ヨーロッパから持ちこまれたものでした」²⁴⁾と。すなわち、今日の日本における縄跳びの始まりは近世日本における伝統的な遊びとしてのそれではなく、全く別個の意味をもつものとして我が国に出現することになったというのである。続く(4)では、この、近代以降の我が国における縄跳びの端緒について見ていこう。

(4) 近代西洋における新しい縄跳びの出現～運動としての縄跳び概念の誕生～

文献2では、(3)までに見てきた遊びとしての自然発生的なものではない種の縄跳びの出現を紹介している。これについては文献1にも同様の紹介があるので、両者を併せて見ていくことにする。

なんらかの文献に「縄跳び」が明らかに登場したのは、かのザルツマン（Christian Gotthilf Salzmann, 1744-1811）の「汎愛学校」で50年に亘り体育教師を務め、運動と遊戯の理論と実践の体系化に取り組んだグーツムーツ（Johann Christoph Friedrich GutsMuths, 1759-1839）なる人

物が著した書『青年のための体操』(Gymnastik für die Jugend, 1793)における「なわとび専用のロープ、グリップの材質や構造など」²⁵⁾についての記述である。文献2によれば、グーツムーツは同書において縄跳びの「基本運動」、「短なわとび」、「長なわとび(その場でおこなう)(走りながら大ぜいでとぶ)」を紹介し、それぞれの跳び方も紹介しているというのである²⁶⁾。併せてグーツムーツは「(縄跳びは)全身の運動である。くりかえしの多い運動である(後略)」²⁷⁾など、運動の内容についても紹介しているという。ここで確認したいのは、体操教師であったグーツムーツがザルツマンの汎愛学校での実践を生かして執筆した書に、既に縄跳びに関する記述が見られたということである。すなわち縄跳びは子どもの遊びを端緒としながらも、18世紀末にはグーツムーツによって「運動」の一つとして認識され、世に紹介されていたということが確認できるのである。

(5) 近代日本の学校における「体操」としての縄跳び」の出現

明治期となり、政府は近代化の重要な手段として新たな教育システムの構築を意図して1872(明治5)年、学制を頒布した。学制の規定により小学校は尋常小学から幼稚小学まで全6種が準備された。特に尋常小学は小学校制度の主体をなすものであり、上下の二等(各4年)に分けられ男女共学とされた。二つの等のうち6~9歳の児童が学ぶ下等小学では全部で14の教科が用意されたが、そのなかに「体術」なる教科が含まれていた。新しい教科体系は江戸期までの寺子屋における学習内容の核とされた「読み書き算」を離れ、また藩校の学習内容とも異なり、多数の新教科によって編成されたわけだが、それは欧米の教育内容を模範とするものであった。ここに新たに導入された「体術」は翌年には「体操」と改称され、今日における「体育」の基本となったのである。

その後、1879(明治12)年の「教育令」を経、1880(明治13)年の「改正教育令」において「小学校教則綱領」が文部省より定められ、小学校を初等科(3年)・中等科(3年)・高等科(2年)の三段階編成とし、教科も改編された。初等科における教科数は僅か6科となり、順に修身、読書、習字、算術、(唱歌)、体操と定めら

れた。見れば容易に気付くように、学制において14にも及んだ教科が大幅に減らされ、「復古思想」「欧米心酔からの脱却」が目指されたことが明らかである。寺子屋で教授された「読み書き算」が「読書」「習字」「算術」として設置され、それらに先んじて「修身」が置かれ、「教授法等が整うのを待って」²⁸⁾設けることとして設定された「唱歌」が「算術」に続いたわけだが、初等科教科目の結尾に置かれたのが「体操」であった。

「体操」の研究の場として文部省は「体操伝習所」(のちの東京師範学校体育専修科、現：筑波大学)を設置、欧米から専門の指導者を招いて「体操」の開発と研究に取り組み、そのなかに西洋にて誕生した縄跳びが採り入れられた。卒業生は師範(教員)となって全国に出向き、そこで学んだ「縄跳び」を拡大していったのである。文献2には、当時の「体操」の指南書として、1)岡本岱次郎著『簡易戸外遊戯法』(小林八郎/集英堂、1886):日本初の縄跳び解説本、2)前田武之輔編『小学生徒戸外遊戯法』(開文堂、1887):長縄跳びが紹介されている、3)家永岩太郎著『教育的遊戯の原理及実際』(同文館、1901):縄跳びリレーが紹介されている、の三つの文献例が紹介されている。いずれの書名にも「体操」ではなく「遊戯」という語が用いられているのが興味深い。この論考は別の機会に譲ることにしよう。ここで、これら三冊のうち2)の『小学生徒戸外遊戯法』から、「縄飛あそび(二)」を紹介する²⁹⁾。

「此遊戯ハ三人或ハ五人並びて各自五尺ほどの繩の両端を持つて振まわし繩の地上に接かんとする時足を揃へて絶えずこれを飛越ゆるなり而してあやまちて繩を足にからめたるものハ負とありて退くべし但し此遊びハ五人又ハ十人いても為し得べきものにして總て指揮者の號令に従ふべし」

掲載された画には、洋装の制服を着用し洋靴を履いた男子児童が縄跳びを行っている様子が描かれている。

こうして西洋から渡来した「体操」としての縄跳び」は縄1本で実施できる簡易な運動として推奨され、とりわけ戦時下においては国民の体力向上に有効だとして国家により推奨されて児童はもちろん老若男女に至るまで広く行われたと文献2は述べている。

(6) 近代日本における「遊びとしての縄跳び」の展開

明治期以降、(5) で見てきたような「体操としての縄跳び」が拡大した一方、近世までの西洋や日本に見られた「遊び」としての縄跳びは、どのような展開を見せたのであろうか？最後に、これについて整理しよう。

文献2では、江戸期から我が国で広く歌いつがれてきた「童歌」³⁰⁾に伴う縄跳びの拡がりについて紹介している。「童歌」は「わらべ歌」「わらべうた」と漢字・平仮名表記がおこなわれ、日本の民俗音楽の一つとして歌い継がれてきており、その例として「かごめかごめ」や「はないちもんめ」などは現代でも幼児から高齢者まで、日本に生まれて育った多くの者にとって馴染みがある。

国立歴史民俗博物館名誉教授で民俗音楽学研究を専門とする小島美子は、今から35年前の1986年に公表された論文「日本民俗音楽再考」において、「わらべ歌」の特徴について次のように述べている。やや長いが引用する。

「日本の子どもたちの音楽情況（ママ）について考えてみると、すでに1世紀以上にわたって学校ではわらべ歌とはまったく異質のヨーロッパ近代の芸術音楽とその亜流としての教育音楽のみを教え、（中略）いってみれば日本の子どもたちはひじょうに異質な表層の音楽にとり囲まれて暮らしているようなものである。ところがそれにもかかわらず子どもたちは、学校や塾などから解放されて、子どもらしい遊びの世界に立ち返ると、依然として伝統的な性格の強いわらべ歌を歌いながら遊んでいる。このわらべ歌の強靱さには驚くべきものがある。（中略）わらべ歌は遊びのための歌であるから、遊びの場で伝承されているのである。（中略）したがってわらべ歌の伝承の母体は、遊びの集団ということになる。」³¹⁾

小島は、日本の民俗学者である和歌森太郎（わかもり・たろう、1915 - 1977）の説明³²⁾を引用し、文化を「表層文化」と「基層文化」に二分している。この和歌森の分類によれば、「表層文化」とは「高度な価値追求をめざして結晶した、個性的・創造的、また時代性を強く伴う文化」³³⁾であり、「基層文化」とは「その民族の基体をなす人びとのあいだに、集団的・典型的に一般化していて、しかもとくにどの時代に限っ

てということなく、数世代にわたって貫き傳承している文化」³⁴⁾を意味しているとする。ちなみに「表層文化」「基層文化」という名はドイツの民俗学者ハンス・ナウマン（Hans Naumann, 1886-1951）の用語を借りたと和歌森は述べている³⁵⁾。この和歌森の分類を提示したうえで小島は、「わらべ歌」の例として「なわとび歌」³⁶⁾を提示しているのである。すなわち「なわとび歌」は、「基層文化」として、伝統的な子どもの生活や遊びのなかから生まれた、歌と「遊びとしての縄跳び」との合体であると解釈できよう。

文献2においても、「江戸時代以降につくられたといわれる「なわとび歌」として「大波小波」「郵便屋さん お入んなさい」³⁷⁾などを紹介している。いずれも長縄跳びの「なわとび歌」であり、近世末期から近代において作られて傳承されているものであると同書は述べている。こうした「わらべ歌」の一種としての「なわとび歌」とともにおこなわれてきた縄跳びは、前記(5)で紹介した類の縄跳びではなく、あくまで「遊び」の場面で子どもたちのあいだで継承されてきた縄跳びに分類されよう。

さて、「なわとび歌」とともに実施されたか否かは不明ながら、明治期の子どもが縄跳びをおこなっていたことを確認する資料を見ることができる。藤本浩之輔は、著書『聞き書き 明治の子ども 遊びと暮らし』（SBB出版会、1986）において明治期の子ども遊びと生活の様子を市井の人々から聞き取って書き残している。その索引には「なわとび」「なわとび唄」（ママ）という項目も用意され、数人の者が縄跳びをしたと語っている。同書に記載されている縄跳びの記録を全て引用しよう。

- 1) 「まあ、父や母がいない時に縄とびをしますとか」（p.39）（岡林益、女子、1893年生）
- 2) 「それから、輪回し、縄とび、竹馬。」（p.64）（杉山要助、男子、1895生）、
- 3) 「門へ出て遊ばはる人は、「なわとび」や「まりつき」などもしてました。はあ、その時分からなわとびがありました。（中略）あれ、なわとびいいました。ああ、ぐるぐる回して跳ぶのもありました。」（p.71）「運動会は、（中略）下鴨神社に行ってします。（中略）やっぱり、走りしたり、なわとびして走ったり、綱引きしたり、今と同じことですワ」（p.75）（伊藤ふみ、女子、1895生）

4)「わたしが四年生ぐらいの時、なわとびはやったことがありました。それで、学校へよう縄を持って行って、先生にとられました。ええ、今みたいなええもんとちごて、ワラの縄ですよ。くるくる巻いて持って行ってとられました。さあ、いかなのかしらんねえ……。」(p.84)「履物は、常の時はわらぞうりでした。」(p.85) (吉田すえ、女子、1895生)

5)「境内では縄とび遊びがありましたね。おはいんなさいとか言ってね。縄をくぐりながら鬼ごっこをしますネン。鬼がこん間に早よくぐって向うへ逃げんならんで気がせきましたワ。縄とびにはわら縄もつかいましたけど、荷造りに使う麻紐もありました。わたしたちはあれを使うたと思いますワ。」(p.139) (吉水雪枝、女子、1898生)

6)「裏の廊下(筆者注：自宅の廊下のことである)のそこでは「なわとび」しました。なわを回してとぶのも、なわとび言いましたが、両方からなわを張って、下から順々に上げていってとぶなわとびもありました。「きょうは、一だん二だんせえへんか？」いうて、これは「一だん二だん」とも言いました。(p.196) (藤田サダ、女子、1899年生)

7)「ナワトビは一人で跳ぶの人が多いですねえ。皆で歌をうとうて跳ぶようなナワトビはしませんでした。歌うとうて跳ぶように大きな時分には、もう遊びませんでしたねえ。(p.324) (高嶋キミ、女子、1893年生)

8)「それから、もうひとつは、「縄とび」ね。いや、縄は機械ではなく、手でのうた簡単なもんだ。学校へもって行って、男も女もやりましたワ。一人でとぶのもあるし、長い縄で三人も四人もとぶ、そんなのもやりました。」(p.356) (山崎達馬、男子、1893年生)

本書には34名の明治の子どもたちの聞き取りが掲載されているが、うち8名が縄跳びの記憶があると語っており、実に1/4の子どもが縄跳びをおこなっていたことが確認できる。

ただ、これら8名のうち学校教育において公的に縄跳びをしたと語っているのは3)の子どもが運動会でおこなったと述べているのみで、他の子どもたちは基本的には自宅で縄跳びをおこなっていたと読み取れる。なかには学校には「持って行って」いたと述べている子どももいて、学校ではやっていなかったことが裏付けられる

(4, 8)。縄跳びの種類としては、一人での短縄跳び(7, 8)、複数での長縄跳び(3, 5, 8)、段跳び(6)をしていたという記録がある。縄の材料としては、藁縄(5)、麻紐(5)、手縫い(8)などが使用されていた。市井の子どもは日常的には藁草履で縄跳びをしていたものと想定できる語りもある(4)。縄跳びをしていた記憶のある子ども8名のうち6名が女子であるとともに、男女ともにおこなっていたという語りもあり(8)、男女を問わず縄跳びをおこなっていたことが確認できる。

なお、上記の語りのなかに、「なわとび歌」を歌いながら跳んでいた語りも確認できた(5)。「おはいんなさい」と言っていたところから、先に(6)で紹介した「郵便屋さん」や、「おじょうさん」(「おじょうさん、おはいんなさい」という歌詞がある)と呼ばれるものではないかと想定される。

なお、他の子どもも以下のような語りをおこなっている。

9)「次のはわらべ唄ですが、天保生まれのおば(祖父の妹)が、正夫さんの子ども時代の歌も徳川時代と同じやで言うてはりましたさかい、これらのわらべ唄は古いもんやと思います。(中略)

○なわとび唄

大波小波 高い山へのぼって 低い山にのぼって一回、二回、三回、四回、五回、六回、七回、八回、九回、十回お次のお方おはいりはいよろし」(pp.274～275) (井上正夫、男子、1892年生)

この「なわとび歌」は前掲文献2にも別の歌詞ながら「大波小波」として記載されている(p.16)。上記の語りによれば江戸期から歌い継がれてきた歌だそうで、先に紹介した小島論文における「基層文化」の特徴を顕著に示していると言えよう。

こうした明治期の子どもからの聞き取りから明らかなのは、既に明治初期に「体操」としての縄跳び」が広く初等教育課程に導入されていたにも拘わらず、子どもだった頃を回想すると人々の胸に蘇るのは学校教育における「体操」としての縄跳び」ではなく、生活のなかでおこなっていた「遊びとしての縄跳び」であるということである。この点は注目に値しよう。

(7) 総括

本論文を執筆している現代において縄跳びは、健康維持・増進、心肺機能の向上、体重調節など数々の点で高い運動効果が科学的に証明されたものとして承認されているのは言を俟たない。しかしその一方で縄跳びは、技術や演技を競う競技として人気が高まったり、「新体操」種目に「ロープ」(縄)が採り入れられて縄跳びの要素も含まれたり、単に運動効果のみを狙うのではなく技や美を表現する楽しさをも併せ持つものとしても進化を遂げている。1における縄跳びの起源とその変遷の論考をとおして筆者は、「体操としての縄跳び」が出現する以前から存在していた「遊びとしての縄跳び」の側面の重要性和意義を改めて確認させられたことをここに述べおき、続く現代の縄跳び考へと繋げたい。(永井理恵子)

II. 方法

1. 調査対象とした授業の内容

調査対象とした授業は、本学2年次前期科目「体育実技」で実施した「大縄跳び」である。なお、授業者は、筆者(高橋裕勝)である。

(1) 体育実技の概要

体育実技は、基礎教育科目であり、幼稚園教諭2種免許・保育士資格取得の必修科目でもある。シラバスでは、授業の概要を「様々な運動の実践を通して、幼児期から生涯にわたる健康の維持・増進に関わる知識・技能について学ぶ。仲間と共に活動する中で、コミュニケーションの方法を学ぶ」と説明している。

特徴としては、毎回の授業後に「授業内容」と「気づいたことや感じたこと」を授業ノートへ記録することを課題としている点である。

(2) 大縄跳びの概要

授業は、大縄跳びの実践を通して、幼児の身体的な発達を踏まえた遊び方やその援助について学ぶ内容となっている。名称は、過去の授業実践のなかで、長縄ではなく、大縄と呼ぶ学生が多いという実態から「大縄跳び」としている。

主に実施した種目は、以下の通りである。

1) くぐりぬけ系

- ・かぶりなわくぐり

2) 大波小波系

- ・「ぐーぐー跳び」と「とんとん跳び」

3) 大波小波系～回旋とび系

- ・ジャンケン跳び
- ・ゆうびんやさんのおとしもの

4) 回旋とび系

- ・むかえなわ1回跳び
- ・「ぐーぐー跳び」と「とんとん跳び」
- ・かぶりなわ8の字1回跳び

種目の名称は、佐藤(1981)に倣ったが³⁸⁾「ぐーぐー跳び」と「とんとん跳び」は、筆者が、幼児の跳び方の特徴を表すものとして考案した名称である。

「ぐーぐー跳び」は、1回旋1跳躍である。縄が1回旋するたびに、「ぐー」と深くしゃがんでから跳ぶ動きを表している。「とんとん跳び」は、1回旋2跳躍である。縄が1回旋する間に、軽快に「とんとん」と2回跳ぶ動きを表している。

筆者は、過去に幼稚園教諭として、幾度となく大縄跳びを実践したが、幼児が「ぐーぐー跳び」を経て「とんとん跳び」へ移行する姿を数多く確認している。

2. 調査対象

本学2年次前期科目「体育実技」の受講者48名を調査対象とした。2クラス開講科目であり、受講者数の内訳は、c1(22名)、c2(26名)である。

3. 調査時期

調査対象とした授業は、2021年5月に実施し、授業ノートの提出は、同年7月末とした。

4. 調査内容

提出された授業ノートから、調査対象となる授業における「気づいたことや感じたこと」についての記述をデータとした。なお、「授業内容」についての記述と「挿絵」は、データ対象外とした。

5. 倫理的配慮

学生に研究の目的と意義、データの収集方法、個人情報保護、人権保護および安全管理、インフォームドコンセントについて、口頭と文書で説明し、書面で同意を得た。本研究は、本論筆者が所属する帝京短期大学研究倫理委員会の倫

理審査を経て実施された（審査番号 No.29）。なお、本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

6. 分析方法

授業ノートから得られたデータは、Excel 形式のファイルに変換し、テキストマイニングの手法を用いて分析する。IT用語辞典 e-Words によると、テキストマイニングとは、定型化されていない文字情報の集まりを自然言語解析などの手法を用いて解析し、何らかの有用な知見を見つけ出すことと説明している³⁹⁾。

本研究では、テキストマイニングソフトである KH Coder 3 を使用し「計量テキスト分析では、人間が文章を目で読み、質的に解釈することを決して否定していない。むしろ、計量的な分析の結果を参考にして、もとの文章の質的な解釈をおこなうという方法である」という樋口 (2017) の方針⁴⁰⁾ に沿って、次の手順で分析をすすめる。

- (1) コマンド「前処理の実行」から、データベーススタツを把握する。
- (2) コマンド「抽出語リスト」から、抽出された語の出現数を把握する。
- (3) コマンド「共起ネットワーク」から、抽出されたサブグラフより、語と語の繋がりや出現パターンの似通った語のグループを把握する。
- (4) コマンド「KWIC コンコーダンス」から、もとの文章を辿り、出現数の多い抽出語がどのような文脈で用いられているのかを把握する。

III. 結果

調査対象者は、48 名であるが、授業ノートに分析の対象となる記述がない者 2 名と欠席者 5 名のため、41 名のデータを用いて KH Coder3 により分析した。

「前処理の実行」から、得られたデータベーススタツは、総抽出語数（使用）：3480（1436）、異なり語数（使用）：536（400）、文ケース数：175 であった。

Table 1 は、「抽出語リスト」の結果から、出現数 6 以上の抽出語（40 語）と出現数を示している。なお、上位にある「ぐーぐー跳び」と「とんとん跳び」は、強制抽出する語の指定を行った。

Figure 1 は、「共起ネットワーク」で描出され

た抽出語からなる共起ネットワークであり、五つのサブグラフが検出された。抽出語間の線は、強い共起関係ほど濃い線で表され、円は、抽出語の出現数に比例して大きく表されている。なお、集計単位は文、出現数による語の取捨選択は、最小出現数を 6 とし、サブグラフ検出の手法は、random walks を選択した。

IV. 考察

本稿では、出現数の多い抽出語を含むサブグラフや筆者が特徴的だと判断したサブグラフに注目し、「KWIC コンコーダンス」から、各サブグラフの抽出語が、学生の記述のなかで、どのような文脈で用いられたのかを探り、実際の授業内容と照らし合わせながら考察していく。なお、学生の記述内の () は、一部を除き、必要に応じて筆者が補足したものである。

Table 1. 抽出語と出現数（6 以上）

抽出語	出現数	抽出語	出現数
跳ぶ	103	友達	10
縄	69	縄跳び	9
ぐーぐー跳び	41	みんな	8
思う	40	手	8
とんとん跳び	34	声	8
大縄	23	足	8
人	22	大切	7
回す	17	知る	7
子ども	17	沈む	7
入る	16	離す	7
タイミング	15	イメージ	6
ぐ	14	ステップ	6
感じる	13	一度	6
リズム	12	越える	6
軽い	12	曲げる	6
楽しい	11	見る	6
自分	11	子	6
ジャンプ	10	少し	6
跳べる	10	踏ん張る	6
難しい	10	膝	6

1. 幼児の跳び方

サブグラフ 01 は、「跳ぶ」「ぐーぐー跳び」「とんとん跳び」「リズム」「軽い」「ジャンプ」「沈む」「ステップ」「一度」「越える」「踏ん張る」の抽出語から構成されている (Fig.1)。

抽出語から文脈を探ったところ、「ぐーぐー跳び」と「とんとん跳び」の二つの跳び方を対比するようにして説明する記述が多くみられた。よって、サブグラフ 01 を「幼児の跳び方」と命名し、学生の記述をもとに考察する。

(1) 初めての経験

幼児の大縄跳びを想定し、1分間に約70～80回程度のテンポ⁴¹⁾で揺れる縄(大縄小波系)あるいは、回る縄(回旋とび系)を、「ぐーぐー跳び」と「とんとん跳び」で跳ぶことを課題とした。幼児は、縄を跳び越えるために、深くしゃがんで跳ぶ「ぐーぐー跳び」から覚え始める。

次第に動きが洗練され、さほどしゃがまなくても、小さく軽快に跳べるようになってくると、「とんとん跳び」ができるようになってくる。二つの跳び方から、幼児の動きの発達過程を身体で感じることがねらいである。

学生の記述①②のように、二つの跳び方を意識するのは、ほぼ全ての学生が初めての経験であるとともに、「ぐーぐー跳び」に苦戦する学生が多くみられた。「とんとん跳び」はできるものの、幼少期に習得したはずの「ぐーぐー跳び」が難しいという現象を実感し、幼児の動きかたをイメージしながら「ぐーぐー跳び」のコツを探る学生の姿がみられた。

学生の記述①

とんとん跳びとぐーぐー跳びは、全く意識してやったことがなく、ぐーぐーは、少し難しく感じた。

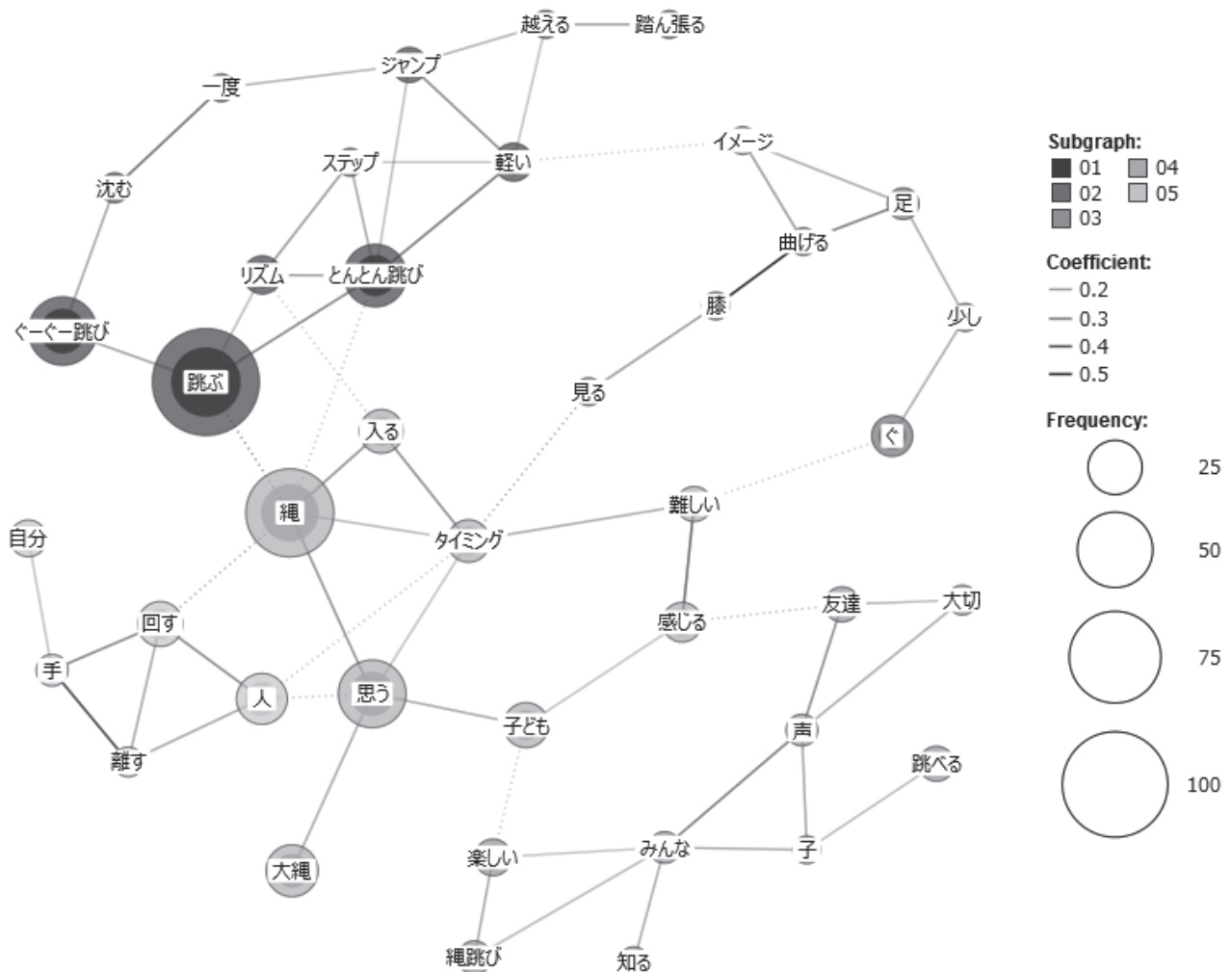


Figure 1. 抽出語からなる共起ネットワーク (最小出現数 6)

学生の記述②

いつも縄跳びを跳ぶ時は、無意識にとんとん跳びで跳んでいることが分かり、ぐーぐー跳びに慣れるまでに少し時間がかかりました。

(2)「動きかた」を言葉で表現する

二つの跳びかたを、言葉で表現しようとする試みが多数あった。「ぐーぐー跳び」は「一度」「沈む」、「とんとん跳び」は「軽い」「ジャンプ」「ステップ」「リズム」を用いた表現が多くみられた。学生の記述③は、抽出語が複数含まれており、サブグラフ 01 の全体像を表していると考えられる。また「短縄の1回旋1跳躍と1回旋2跳躍」との関係についても言及しており、二つの跳び方の理解の深さ伺える。

多くの学生が苦戦した「ぐーぐー跳び」は、学生の記述④の「足の裏全体を着いて姿勢を低くして」のように、抽出語と同意と考えられる表現や、学生の記述⑤の「どすん」といった擬音語・擬態語を用いるなど、多様な表現がみられた。また、幼児は、動く縄に対して、最初、正対して跳ぶことから始める。一定のテンポで跳ぶ意識は薄く、一回一回、目の前に近づく縄を目視して跳び越えるため、「ぐーぐー跳び」の覚え始めは、回し手からみると「左右に大きく動く」ことになる。「とんとん跳び」ができるようになると、左右の移動は小さくなり、回し手と正対して「その場」で跳ぶようになる。学生の記述④は、跳ぶ位置の変化についても言及し、「動きかた」を立体的に捉えた表現となっている。

学生の記述③

ぐーぐー跳びは、跳ぶ際に一度沈んでからまた跳ぶ、ゆっくりめ。とんとん跳びは、跳んだ後も軽くとんとんとステップをふむ。これらは、後の短縄の1回旋1跳躍と1回旋2跳躍へと繋がる。

学生の記述④

ぐーぐー跳び（小さい子に多い跳び方）：足の裏全体を着いて姿勢を低くして跳ぶ。縄を越えるようにするので、左右に大きく動く。とんとん跳び：その場で軽やかに跳ぶので、ほとんど動かない。縄があってもなくても同じように跳ぶ。

学生の記述⑤

ぐーぐー跳び：「どすん」のイメージ。縄はゆっくりめで1回1回踏ん張る感じ。とんとん跳び：とんとんと軽く跳ぶ。

2. 大縄の楽しさ

サブグラフ 03 は、「楽しい」「友達」「跳べる」「縄跳び」「声」「みんな」「知る」「大切」「子」の抽出語から構成されている (Fig.1)。抽出語から文脈を探ったところ、大縄の楽しさについての記述が多くみられた。よって、サブグラフ 03 を「大縄の楽しさ」と命名し、学生の記述をもとに考察する。

(1) みんなで楽しさを実感

学生の記述⑥⑦⑧より、友達みんなで声を出しながら、大縄跳びを楽しんだ様子が読み取れる。「みんな」と「声」は、太い共起線で繋がれ、両者から複数の共起線が伸びていることから、「みんな」で「声」を出し合うことが、楽しさの一つの要因になると考えられる。

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行と同時期に入学し、制限のある学校生活を送るなかで、実際の保育の場に巣立つ前に、大縄跳びを通して、領域「人間関係」ねらい (2)「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」⁴²⁾ を実感できたことは、貴重な経験となるであろう。

学生の記述⑥

声を出して跳ぶと跳びやすいということがわかり、将来社会人になってやる機会があれば、みんなで声出してやりたいと思います。縄一つでクラスで盛り上がることができ、楽しいと感じた。

学生の記述⑦

1つの縄をつかってみんなで行う大縄跳びは、最初はできなかつたらはずかしいと思っていたけれど、周りのみんなが応援してくれていたからがんばろうとやる気がでた。子どもたちにもこのように仲間と共にがんばる楽しさを伝えられる保育者になりたいと思った。

学生の記述⑧

なかなか縄に入ることができない子には、タイミングを自然とみんなで知らせながら今日の授業を行うことができたので、子どもたちにも協力して頑張る楽しさを大縄から学んで欲しいです。

(2) できる楽しさ

学生の記述⑦⑧に、「がんばる楽しさ」とあるが、文脈から「がんばってやったらできた楽しさ」といえそうである。学生自身の「できた」という感動から、子どもたちにも「できた」を経験して欲しいという思いが読み取れる。

年長児になると、運動の楽しさの一つである「できる」にも関心が高まり、縄跳びや鉄棒を一生懸命に練習する子もでてくる。しかしながら、幼児期は、運動すること自体が楽しいという経験を十分に積むことが重要であり、この積み重ねが児童後期の練習のプロセスの先にある「楽しさ」を引き出してくれることになる⁴³⁾。楽しさの経験は発達段階に応じて捉えて行く必要がある⁴⁴⁾。

とはいえ、保育者として、自ら意欲的に練習する幼児に何かしてあげたいと思うのは当然であろう。保育者の「がんばって」といった抽象的な言葉だけでは、満足しない子どももいる。保育者が「どうがんばるのか」について、子どもにコツを伝えられるとよいのだがなかなか難しい。他者の運動に関わろうとする時、まず頼りになるのは、自身の身体感覚である。学生自身が各運動課題のなかで「何をがんばったのか」を常に探ることが大切である。

3. 大縄の難しさ

サブグラフ 04 は、「縄」「思う」「大縄」「子ども」「入る」「タイミング」「感じる」「難しい」の抽出語から構成されている (Fig.1)。抽出語から文脈を探ったところ、大縄の難しさについての記述が多くみられた。よって、サブグラフ 04 を「大縄の難しさ」と命名し、学生の記述をもとに考察する。

(1) 何が難しいのか

学生の記述⑨の「縄を (に) 入り、抜ける」は、「かぶりなわくぐり」を指し、「後ろ回しの状態で入って跳ぶ」は、「むかえなわ 1 回跳び」

を指している。前者は、跳び手の頭上から、大波のように回る「かぶりなわ」に入り、縄を跳ばずに走り抜ける遊びである。後者は、跳び手の足元から、すくうように回る「むかえなわ」に入り、縄を一回跳んでから走り抜ける遊びである。両者ともに、ほぼ全ての学生が初めての経験であった。

「むかえなわ 1 回跳び」は、入るタイミングがつかみにくいため、苦戦する学生が多くみられた。実際にやってみるとわかるが、限られたわずかな時間に入らないと、簡単に縄にあったてしまう。そして、上手く入れたとしても、すぐに縄を跳ばなければならず、さらには、跳べたとしても、すぐに走りださなければならない難しい遊びである。

今回の調査対象となる授業では、「むかえなわ 1 回跳び」と前出の「ぐーぐー跳び」の二つが、学生たちにとって、特に難しい運動課題であった。

学生の記述⑨

縄を (に) 入り、抜けるというのは難しいと感じなかったのだが、後ろ回しの状態で入って跳ぶというのが、いつも跳んでいる長縄とタイミングが (異なるため) 分からなくなってしまい難しく感じた。この時には、縄のタイミングをつかむために、しばらく縄の動きを見てから入ると良いとやってみて思った。

(2) できるような気がする段階

新しい運動を覚えるためには、「できるような気がする」段階のプロセスが大切である⁴⁵⁾。「できるような気がする」段階とは、運動課題に対して、過去に経験した数々の運動経験から、類似した動きの力の入れ方やタイミングのとり方などを呼び起こし、実際にやっているような動きの感じをつかみとることである⁴⁶⁾。

例えば、学生が苦戦した「むかえなわ 1 回跳び」は、少なくとも、「縄に入り、縄を跳び、回る縄から走り抜ける」三つの動きがあるため、それぞれの動きの感じをつかみ、最終的には、一まとまり且つ流れのある動きの感じとしてつかむことが必要である。成功するかどうかは、縄に入る前に、ほぼ決まっているとみえる。

学生の記述⑨の「しばらく縄の動きを見てから入る」や学生の記述⑩の「いけると思ったら

いく」からは、縄に入る前に、それぞれの感性のもと「できるような気がする」を呼び起こしている様子を読み取れる。この二つの記述にある行動は、運動の学び方を学習しているともいえる。「むかえなわ1回跳び」が「できる」「できない」以上に、重視したいプロセスである。

学生の記述⑩

回っている縄をくぐる時は、タイミングを目で見て、いけると思ったらいく。

4. 大縄の回し方

サブグラフ 05 は、「人」「回す」「自分」「手」「離す」の抽出語から構成されている (Fig.1)。抽出語から文脈を探ったところ、大縄の回し方についての記述が多くみられた。よって、サブグラフ 05 を「大縄の回し方」と命名し、学生の記述をもとに考察する。

(1) 基本的なポイント

回し手には、幼児の動きにあわせて、縄を操る技能が求められる。学生の記述⑩にある「跳んでいる人を見ながら回す」は、回し手にとって、最も基本的なポイントである。跳び手に十分な力量があれば、回し手は、一定の場所で、一定のテンポで揺らしたり、回したりするが、跳び手が幼児の場合は、動きにあわせながら、前後左右、上下に動きながら、変則的なテンポで縄を操らなければならない。学生の記述⑩の「膝を使って」や学生の記述⑫の「自分と縄と一体になっているイメージ」の感覚がないと幼児の動きに即座に反応することは難しい。

学生の記述⑬では、「回すスピードをゆっくりにしたり、はやくしたり援助してあげることで、跳べたことでの自信につながる」とあり、具体的な保育実践をイメージした記述といえる。保育者は、幼児の意欲と技量に合わせて縄を操り、幼児に「跳べた」を上手く経験させ、自信を育むことは大切である。しかしながら、過度な援助は、運動課題のコツを自覚させるチャンスを失う可能性もあるので、十分な見極めが必要である。

学生の記述⑪

縄を回す人は、膝を使って、跳んでいる人を見ながら回す。跳んでいる人が (に) 縄が当たって危ないと思ったら縄を離す (放す) のもあり。

学生の記述⑫

回し手は、手で回すのではなく、自分が縄と一体になっているイメージ。跳ぶ側が危険な場合は、手から離す (放す)。

学生の記述⑬

保育の場で縄を回す際、子どもがぐーぐー跳びかたんとん跳びかを見極めて、跳ぶの (跳ぶ様子) に合わせて、回すスピードをゆっくりにしたり、はやくしたり援助してあげることで、跳べたことでの自信につながるのだと感じました。

(2) 安全面の配慮

「手」と「離す」を繋ぐ共起線は、太く示されており、縄との接触を回避する方法について、二つの抽出語を用いて多数述べられていた (学生の記述⑫)。安全面の配慮という観点では重要であるが、安易に縄を手放すことは、注意が必要である。大縄は、大人数で遊ぶことが多いため、周りの子どもへの注意も必要である。放した縄先がどこに向かうのかを見極めなければならない。回し手には「跳んでいる人」と同様に「周りの人」への注意が必要であるが、その点についての記述は見当たらなかった。

(高橋裕勝)

V. おわりに

本研究では、現代における保育学生の体育授業の在り方について、縄跳びの歴史と授業実践から考察した。

縄跳びの歴史は、文献や論文を基に、民俗学と運動学の二派における成果から、縄跳びのルーツ及び学校体育導入に至る経緯が整理され、1) 遊びとしての縄跳び、2) 運動としての縄跳びの二つの側面が見出されるとともに、前者の重要性と意義を改めて確認した。

授業実践は、学生の授業ノートの記述を、KH Coder3 を用いて分析、考察することにより、授業者が授業中に直接観察できなかった学生の気づいたことや感じたことについて、受講生全体の特徴や課題を見出すことができた。また、考察 1- (2)、考察 3- (2) では、運動学習全般においても応用できる記述もあり、縄跳びの運動学習教材としての価値も確認できた。

今後の課題として三つあげることができる。一つ目は、これまでの授業実践を、遊びとしての縄跳び、運動としての縄跳びの両面から捉え直すこと。二つ目は、個人の授業ノートを、学生がお互いに学び合う教材として利用できるようにすること。三つ目は、学生が授業のなかで、わかりかけたり、つかみかけたりした知識や技能をどのようにして高めていくかである。

【謝辞】

本研究の実施にあたり、調査にご協力を頂きました本学学生の皆さんに、記して謝意を表します。

【文献】

- 1) 科学研究費助成事業 研究成果報告書 平成30年6月21日現在 幼児の運動能力の現状と運動発達促進のための運動指導及び家庭環境に関する研究 研究代表者 森司朗
Retrieved from <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-15H03072/15H03072seika.pdf> (2021年11月7日)
- 2) 前掲1)
- 3) 川上・増田・竹内(2017) 保育者養成のための身体を動かす授業を考える1 保育学生の体力・運動能力調査に関する先行研究の把握 武蔵野教育學論集, 1, 21-31
- 4) 國土将平(2003) 発達段階と子どもの遊び 子どもと発育発達, 1 (3), 142-147
- 5) 学研教育総合研究所 小学生白書 Web版 2019年8月調査「小学生の日常生活・学習に関する調査」
Retrieved from <https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/201908/chapter4/09.html> (2021年11月7日)
- 6) 稲葉茂勝著『縄文人から「新縄人」・ロープスキッパーへのなわとび学』今人舎 2016 p.8
- 7) 同上 p.9
- 8) 同上
- 9) 同上 P.10
- 10) 同上 P.11
- 11) 同上
- 12) 同上 P.12
- 13) 同上
- 14) 同上
- 15) 小林頼子著「遊びと子ども 一十七世紀オランダの絵画と記録から」(『幼児の教育』第106巻 第2号 2007.2 pp.4~12 所収) p.8
例として小林は「大人の冷え冷えとした視線が子どもの遊びに注がれているのが感じられる」と述べている。
- 16) 稲葉茂勝著『縄文人から「新縄人」・ロープスキッパーへのなわとび学』今人舎 2016 p.12
- 17) 榎木繁男他著『誰でもできる楽しいなわとび』大修館書店 2005 p.106
- 18) 同上 pp.106~107
- 19) 稲葉茂勝著『縄文人から「新縄人」・ロープスキッパーへのなわとび学』今人舎 2016 p.13
- 20) 同上
- 21) 榎木繁男他著『誰でもできる楽しいなわとび』大修館書店 2005 p.107
- 22) 同上
- 23) 黒田一充「海浜の聖地における祭祀：国東半島・武多都神社を中心にして」(関西大学博物館紀要11巻, 2005年3月 pp.17~38 所収) p.19 上段1.23~ 下段1.1
- 24) 稲葉茂勝著『縄文人から「新縄人」・ロープスキッパーへのなわとび学』今人舎 2016 p.13
- 25) 榎木繁男他著『誰でもできる楽しいなわとび』大修館書店 2005 p.106
- 26) 稲葉茂勝著『縄文人から「新縄人」・ロープスキッパーへのなわとび学』今人舎 2016 p.14
- 27) 同上
- 28) 文部省『学制百年史』1972 p.188, 1.14
- 29) 前田武之輔編『小学生徒戸外遊戯法』開文堂 1887 ページの記載なし
- 30) 稲葉茂勝著『縄文人から「新縄人」・ロープスキッパーへのなわとび学』今人舎 2016 p.13, pp.16~17
- 31) 小島美子著「日本民俗音楽再考」(国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告(11)』1986.3 pp.247~266 所収) pp.253~254
- 32) 『日本民俗事典』中の「伝承文化」を分担執筆した和歌森太郎による解釈
- 33) 小島美子著「日本民俗音楽再考」(国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告(11)』1986.3 pp.247~266 所収) pp.249~250

- 34) 同上 P.250
- 35) 和歌森太郎分担執筆「伝承文化」(大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂 1972 p.479 所収)
- 36) 小島美子著「日本民俗音楽再考」(国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告(11)』1986.3 pp.247-266 所収) P.254 ほか
- 37) 稲葉茂勝著『縄文人から「新縄人」・ロープスキッパーへのなわとび学』今人舎 2016 pp.16~17
- 38) 佐藤良金(1981) なわとび教室 石河利寛監修 大修館書店 p144
- 39) IT用語辞典 e-Words テキストマイニング Retrieved from <https://e-words.jp/w/テキストマイニング.html> (2021年10月31日)
- 40) 樋口耕一(2017) 計量テキスト分析およびKH Coderの利用状況と展望 社会学評論, 68(3), 334-350
- 41) 前掲38)
- 42) 文部科学省 平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉チャイルド本社
- 43) 森司朗(2003) 幼少期における運動の好き嫌い 体育の科学, 53(12), 910-914
- 44) 前掲43)
- 45) 吉田茂・三木四郎編(1996) 教師のための運動学 金子明友監修 大修館書店 p45
- 46) 前掲45)

Physical education classes for childcare students

—Through the history of jumping rope and classroom practice—

Hirokatsu TAKAHASHI • Rieko NAGAI

Department of Early childhood Education, Teikyo Junior College

【abstract】

【Purpose】 Today's childcare students are of a generation whose motor skills were a concern in childhood, and it is presumed that they have not had enough experience with physical activities since childhood. In order for these students to face the problem of motor skills of young children in the future, it is necessary to give sufficient consideration to what and how they should learn in physical education-related classes at nursery schools. The author is in charge of "Physical Education Practice" at a nursery school, and her task is to have students write "the contents of the class" and "what they noticed and felt" in the class notebook after each class as a reflection study. The purpose of this study is to analyze the descriptions in the class notes using the text mining method, and to find out the characteristics and issues of the students in the class. In this study, we use the class practice of jumping rope as a research object, and we also organize the origin and the transition of jumping rope from a macroscopic viewpoint. The history of jumping rope is based on literature and articles, and the results of the two schools of folklore and kinesiology are combined. In this paper, we describe the history of jumping rope based on the literature and articles.

【Methods】 The history of jumping rope was organized based on literature and articles, and the results in two schools of folklore and kinesiology were combined. The class practice of jumping rope was qualitatively interpreted by analyzing the students' class notes using KH Coder3

【Results】 The history of jumping rope is summarized in the roots of jumping rope and the circumstances leading to the introduction of school physical education. The students' class notes could be roughly classified into four categories: 1) how to jump for infants, 2) the fun of jumping rope, 3) the difficulty of jumping rope, and 4) how to turn the rope.

【Discussion/Conclusion】 The history of jumping rope has two aspects: 1) jumping rope for fun, and 2) jumping rope for exercise, and the importance and significance of the former was reconfirmed. From the students' class notes, we were able to find out what the students noticed and felt, which the instructor was not able to observe directly during the class, as well as the characteristics and issues of the students as a whole. In addition, there were descriptions that could be applied to motor learning in general, and the value of jumping rope as a motor learning material was confirmed. Three issues can be raised for the future. The first is to reevaluate the past class practices from the perspective of both jumping rope for fun and jumping rope for exercise. The second is to make individual class notes available as teaching materials for students to learn from each other. The third is how to enhance the knowledge and skills that students have come to understand or grasp in the class.

【Key words】 childcare students, Physical education, class notes, jumping rope for fun, jumping rope for exercise